

令和 5 年 6 月 11 日現在

機関番号：32689

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2020～2022

課題番号：20K00114

研究課題名（和文）蜜蜂から家畜へー西洋における社会的動物の思想史

研究課題名（英文）From bee to livestock: social animals in the history of western thought

研究代表者

橋本 一径（Hashimoto, Kazumichi）

早稲田大学・文学大学院・教授

研究者番号：70581552

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の成果は以下の3点に要約することができる。
（1）2021年に発表した論文「社会的動物/家畜的人間 ミツバチの利他性をめぐって」において、西洋思想史における「蜜蜂」の議論をたどり直すとともに、社会生物学や集団遺伝学における議論を、その系譜に位置づけ直した。（2）論文「産業的ドグマ空間」における神話的イメージとしての写真（2023年）において、写真のイメージの制度的な機能についての考察を展開した。（3）科学のイメージ性について考察するため、「無知学」の知見を導入した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の成果の学術的意義はまず、生体認証による管理社会の進行すなわち人間の家畜化と、動物愛護の精神の発達すなわち動物の人間化を、表裏一体の現象として捉え、そのような社会はもはや個人主義によっては説明しきれないものとなっていることを示したことであり、この点の社会思想史的な意義は大きい。本研究また、写真のイメージが、現代における主体の形成に欠かせない神話的な機能を果たしていることを示した。これは難解で知られるピエール・ルジャンドルの「ドグマ人類学」を、具体例に即して明解化した点でも意義深い成果であると言える。

研究成果の概要（英文）：The result of this research project can be summarized as follows:

1) In an article entitled "The social animal/the bestial man: the altruism of bees and the modern evolution of the image of society", I first traced a tradition of discussion on the bee in Western thought. I then tried to situate in this tradition the biological and genetic discussion on the altruism of the bee. 2) In an article entitled "Photography as a mythical image in the industrial dogmatic space", I developed a reflection on the institutional role of the photographic image. 3) The introduction of the discussion of agnotology to reflect on the institutional function of the image of science.

研究分野：表象文化論

キーワード：西洋思想史 科学史 蜜蜂 写真史 無知学

1. 研究開始当初の背景

本研究は近年の哲学や人文科学における「動物」に対する関心の高まりと問題意識を共有するものである。たとえばフランスの哲学者エティエンヌ・バンブネは、『三匹の猿コンプレックス(Le complexe des trois singes)』(2017年)において、人文科学の諸問題が生物学や遺伝学に還元される現状を、「動物中心主義(zoocentrisme)」と呼んで批判的に論じている。しかしバンブネは、生物学・遺伝学と人文科学とを対比的に捉えようとするあまり、言語の象徴性や想像力の重要性を再評価するという、ある意味で常識的な結論に行き着いてしまっている。こうしてバンブネは人間が「二つの生」を生きているとして、一方に霊長類学などにより解明される動物的な社会性を、他方に人文科学によって解明される「文化的なフィクション」を位置づけるのである。

これに対して本研究は、集団遺伝学などにおける動物社会についての議論を、思想史的に捉え直し、中世キリスト教世界における蜜蜂のような、社会の同一性の表象の系譜に位置づけることを目指している。本研究のこのような観点からすれば、動物社会をめぐる遺伝学的な議論は、ある種の「文化的なフィクション」として、社会の同一性を表象する役割を、すでに担ってしまっている。本研究はこのように科学的な議論が「イメージ」としても機能していることに着目することで、バンブネの言う「二つの生」のような、人文科学において「動物」が問われる際にしばしば前提とされる二項対立からの脱却をはかろうとするものである。

2. 研究の目的

社会は自らの同一性を表象するためのイメージを必要とする(cf. コルネリユウス・カストリアデス『想念が社会を創る』、1975年、邦訳1994年)。西洋においてそのようなイメージの役割は、伝統的に動物たちが担ってきた。本研究で取り上げる「蜜蜂」は、そのような動物の代表である。たとえば中世キリスト教世界において蜜蜂は、交尾をせずに繁殖するという誤った認識のもと、処女性と結び付けられ、王蜂を頂点とするヒエラルキーを形成する蜜蜂社会は、人間社会にとっての理想として語られてきた。ところがこのように理想的な社会を代表してきたはずの蜜蜂は、18世紀初頭のマンデヴィル『蜂の寓話』になると、むしろ私利私欲にまかせて行為する身勝手な存在となり、やがて蜜蜂をはじめとする動物たちは、人間社会の比喩としては下火になっていく。現代では社会は単なる素粒子状の個人の集まりとみなされるようになり(たとえばブルデュー)、社会をひとつのイメージとして表象する必要性は失われたかのようだ。一方で蜜蜂は、19世紀末になって、生物学的な議論の中で、人間社会の起源として再び注目を浴びるようになる。本研究は、このような現代の科学における蜜蜂の議論を、西洋思想がアリストテレス以来好んで取り上げてきた蜜蜂をめぐる議論の系譜に位置づけ直し、蜜蜂の利他的行動を社会性の起源とみなすような科学的な議論が、今日における社会のイメージとしても機能していることを明らかにする。そのうえで本研究は、そのような利他性を根拠として動物と人間を地続きのものとして表象する社会観が、個人主義に基づく近代的な社会観とは別種の社会像を形成しつつあることを示し、その新たな社会イメージの輪郭を浮かび上がらせることを目指す。

3. 研究の方法

本研究の方法は以下の3点により構成されている。

(1)「蜜蜂」が人間社会の比喩として用いられてきた例を、思想史的に跡付ける。アリストテレスの『政治学』(1253a)にも、人間社会のたとえとして登場する蜜蜂は、中世になると、交尾をせずに繁殖するという誤った認識に基づき、処女性と結び付けられて、キリスト教世界において理想的な社会を代表する存在となる。このように倫理的にも理想とされた蜜蜂は、18世紀初頭のマンデヴィル『蜂の寓話』になると、むしろ私利私欲にまかせて行為する身勝手な存在となり、やがて蜜蜂をはじめとする動物たちは、人間社会の比喩としては下火になっていく。ところが蜜蜂は、19世紀末になると、社会生物学の議論において、人間社会の起源として再発見される。それは集団遺伝学へと受け継がれ、蜜蜂の利他的行動を社会性の起源とする議論は、今日でも有効性を保っている。本研究は、このような生物学や遺伝学における蜜蜂が、現代において社会に同一性を与えるイメージとして機能していることを明らかにする。

(2)現代における「イメージ」の制度的機能を、写真のイメージに着目することで解明する。ピエール・ルジャンドルが指摘するように、社会を構成するために必要な「イメージ」は、主体を形成するために欠かせないイメージでもある。しかし現代において主体は生物学的に生まれてくるだけで十分と考えられており、イメージが主体の形成のために果たす制度的な役割については見過ごされてしまっている。しかしルジャンドルによればこのようなイメージは人間が言語という制度に参入して人間になるために不可欠なものであり、現代においてもこうしたイメージは何らかの形で機能しているはずである。本研究は現代においては写真がそのような制度的なイメージの役割を担っていると仮定し、主として写真とアイデンティティの関係をめぐる歴史をたどり直しながら、この仮説を検証する。

(3) 科学のイメージの批判的な検討。現代においては、科学的な論証のプロセスを経ることなく、ただ「科学的」であるとお墨付きが、「正しさ」として機能してしまうことがある。このような現象を、科学の本質とは関係のない単なる盲信として、切り捨ててしまうことはできるのだろうか。科学も社会的な営みである以上、社会を構成するイメージと無関係ではいられないだろう。本研究は、イメージとしての「科学」に着目して、その社会的・制度的な機能の解明を目指す。

4. 研究成果

本研究の成果は、それぞれ上述の(1)~(3)に対応する、以下の3点に集約することができる。

(1) 2021年に発表した論文「社会的動物/家畜的人間 ミツバチの利他性をめぐって」は、本研究の中間的な成果を総括したものである。この論文においてはまず、アリストテレス以来の、西洋思想において蜜蜂の群れを人間の社会にたとえる議論の歴史をたどり直し、アリストテレスからウェルギリウスを経て、中世のキリスト教世界に至るまでの、働き蜂の献身的な姿を、理想的な臣民になぞらえる系譜を確認した。しかし18世紀のマンデヴィルによる『蜂の寓話』になると、働き蜂の献身は、各自の利己的な行動に解釈し直され、それぞれが勝手な振り舞いをしてつつも全体としては調和の取れた社会として描き出される。このような社会観はアダム・スミスによる有名な「神の見えざる手」の議論に引き継がれるが、そこではもはや蜜蜂は引き合いに出されることがない。「所有者」が個人の基本単位となり、所有の主体たる「人」と所有物とみなされる「動物」との間の区別が確立されると、人間社会を動物にたとえる議論は下火となったのである。

このように西洋思想史における蜜蜂の議論の流れを整理した上で、本論文は、19世紀末以来の社会生物学や集団遺伝学の議論を、社会イメージとしての蜜蜂の再発見と捉え直す。すなわち、生物学が蜜蜂の利他性を人間社会の起源とみなし始めたとき、「所有者」を単位とする個人主義的な社会とは別の社会が姿を現したのである。このような動物と人間とが地続きのものとして捉えられる社会においては、人間は生体認証などによって家畜と同様に管理される。指紋のような生体認証が実用化された19世紀末は、動物愛護の観点から肉食主義の主張がなされるようになった時代でもある。私たちはすでに個人主義では捉えきれない社会を生きており、こうした社会の姿を正しく描き出す努力が必要である。

2021年から2022年にかけてフランスのナント高等研究所にフェローとして研究滞在を行ったことも、本研究における重要な成果のひとつであるが、この滞在期間中に行った資料調査では、17世紀のビュフォンを始めとする博物学での蜜蜂の議論を整理した。そこにおいては蜜蜂の巣の複雑さなどが議論される場合でも、人間社会と比較されることはなかったことが確認でき、上述の論文での議論を補強することができた。この成果を加味した仏語発表“L’animal social/l’homme bestial : l’altruisme des abeilles et l’évolution moderne de l’image de la société”を、ナント高等研究所のセミナーにて行った。一連の成果は分担執筆として参加する著書にまとめて、2023年度中に刊行の予定である。

(2) 論文「産業的ドグマ空間」における神話的イメージとしての写真」(2023年)は、ピエール・ルジャンドルが主張するイメージの神話的な機能を、現代においては写真が果たしていることを示そうとしたものである。この議論は2020年に発表した英語論文“An unfaithful trace”において展開したような、写真を被写体の物理的な痕跡と捉える従来の写真論の批判の延長線上にある。西洋の法的な主体とは、単に生物学的に生まれるだけではなく、出生届を提出して記録簿に登録されることにより、「人格」という擬制的な存在として成立する。そこにおいては肉体と紙との隔たりが常に問題となるのであるが、写真とはまさしく肉体を紙に変化させることのできる装置だった。こうしてパスポートなどの身分証明書に貼られるようになった、紙になった自分自身の姿は、ルジャンドルの言うところの「鏡」、すなわち主体が自らのアイデンティティをそこに見出すと同時に、自らの限界も認識させる、神話的なイメージに他ならないだろう。本論文はまた、ルジャンドルの「ドグマ人類学」と、ハンス・ベルティンクの「イメージ人類学」との接点を探る試みでもある。

また、このような西洋にとっての写真の人類学的な意義を検討する観点から、論文「最初で最後の写真論? ロドルフ・テプフェールの「ダゲール板について」(1841)をめぐって」を執筆した(2023年6月刊行予定)。

(3) ナント高等研究所には様々な分野の研究者が研究滞在をしており、彼らとの議論は本研究にとっても大きな寄与となった。表象文化論学会の学会誌『表象』での座談会「フレンチ・フェミニズム」(2022年)は、そうした議論の成果のひとつである。フランスにおける近年のフェミニズム思想の展開は、あらゆる分野の研究にとって無視できないものであり、この座談会においてはその意義を整理し、日本の読者への紹介に努めた。さらに本研究にとってより本質的な意味を持つのは、「無知学」の知見を得たことである。科学が「無知」の生産に寄与することを批判的に検討する、科学史の一分野の「無知学」は、科学のイメージ性と向き合う学問分野であり、本研究を推進する上での重要な示唆を得ることができた。この「無知学」のフランスにおける展開を日本の読者に紹介するために、イラナ・ロウィの論文「黙殺された身体? 女性の身体を

めぐる知と無知の同時生産に向き合うフェミニストたち」を翻訳した（2023 年 7 月刊行予定）。
また上述の分担執筆にはこの無知学の知見も取り入れてある。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 橋本一径	4. 巻 49-12
2. 論文標題 社会的動物 / 家畜の人間 ミツバチの利他性をめぐって	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 現代思想	6. 最初と最後の頁 69-77
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 橋本一径	4. 巻 52
2. 論文標題 目で触れる 戸田ツトムと書籍カバーについて	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 ユリイカ	6. 最初と最後の頁 394-402
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 橋本一径	4. 巻 1190
2. 論文標題 「産業的ドグマ空間」における神話的イメージとしての写真	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 思想	6. 最初と最後の頁 117-128
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 イラナ・ロウィ (橋本一径訳・解説)	4. 巻 17
2. 論文標題 黙殺された身体? 女性の身体をめぐる知と無知の同時生産に向き合うフェミニストたち	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 表象	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 橋本一径	4. 巻 47
2. 論文標題 最初で最後の写真論? ロドルフ・テプフェールの「ダゲール板について」(1841)をめぐって	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 美術フォーラム21	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件(うち招待講演 2件/うち国際学会 1件)

1. 発表者名 橋本一径
2. 発表標題 私たちはミツバチであるのか? 社会のイメージと身体
3. 学会等名 文学としての人文知(招待講演)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Kazumichi Hashimoto
2. 発表標題 L'animal social/l'homme bestial : l'altruisme des abeilles et l'evolution moderne de l'image de la societe
3. 学会等名 Seminaire hebdomadaire de l'Institut d'Etudes Avancees de Nantes (招待講演)(国際学会)
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 Felix JAGER, Jun TANAKA (ed.)	4. 発行年 2020年
2. 出版社 De Gruyter	5. 総ページ数 240
3. 書名 Bilder Als Denkformen	

1. 著者名 門林岳史、増田 展大	4. 発行年 2021年
2. 出版社 フィルムアート社	5. 総ページ数 296
3. 書名 クリティカル・ワード メディア論	

〔産業財産権〕

〔その他〕

相澤伸依, 清水晶子, 中村彩, 橋本一径, 木下千花「座談会 フレンチ・フェミニズム」、『表象』、第16号、2022年、68-94頁。
--

6. 研究組織		
氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------